

殺虫剤殺菌剤と除草剤との近接施用

DCPAが初めて日本に輸入されてから既に10年を越す。この薬がヒエを殺してイネに殆んど影響を与えないのを見て、我々は全く驚きの目を見張った。この選択性の機構をあるいは物理的な、あるいは化学的な条件にこれを求めたが、はしなくもこれをパラチオンと併用することによって、この選択性が全くなくなってしまふことが判って、その原因が生理化学的なものであることが明らかになってきた。併用する薬はパラチオンのみならず、その他多くの有機リン系殺虫剤、カーバメイト系殺虫剤と同様な結果を生じるので、この性質を逆用してワイダックのような選択性のない除草剤の開発もなされるに至った。これと同時に有機リン系殺虫剤、カーバメイト系殺虫剤とDCPAとの併用、または近接散布は稲に薬害を起こすという点で固くいましめられるようになった。概してこれらの殺虫剤を先に散布し、後からDCPAを散布した場合の方が逆の場合より薬害が大きいようである。

しかし、それならどういう条件下で、どういう剤型のものをういた場合、幾日経てば安全であるといったような、詳細な試験成績があるかという、必らずしもこれに答え得るだけの充分な材料を見出すのに困難を感じる。経験的に7~10日といっているといっても過言ではないような気がする。土壤に施用した殺虫剤は一般に散布したものより有効期間が頗る長いのが通例である。2か月間もアブラムシを防除し得る薬も少なくない。これと同時にこのような薬がDCPAとの関連において薬害を出す惧れの期間も散布の場合よりかなり長いことが想像に

目 次

キューバにおける	
雑草防除の現状と問題点	2
農林省北陸農業試験場	
作物部 中山 治彦	
昭和46年度新供試除草剤・生育調節剤一覧	
第1表 昭和46年度対象別	
供試薬剤一覧表	7
第2表 昭和46年度新供試	
薬剤成分一覧表	8
(財) 日本植物調節剤研究協会	
植調協会だより	16
新除草・調節剤	
オキシペロン	20

難くない。事実土壤施用後35日にDCPAを散布して劇しい薬害を起こした試験成績もある。

最近殺菌剤にも有機リン系のものがあり、また土壤施用の道も開けつつある。一方比較的安全にDCPAと併用し得る有機塩素系農薬がその慢性毒性の故を以て禁止の運命をたどりつつある。このような時にあたって、殺虫剤・殺菌剤施用後、安全にDCPAを使用し得るまでの期間を、土性、気象条件、剤型、施用法等それぞれの状態に合わせて明確にしておく必要があるのではないだろうか。

(日本植物調節剤研究協会会長 河田 党)